

RED DRAGON

backyard notes



RED DRAGON

backyard notes

PREFACE

まえがき

レッドラの思い出は楽しかった事も苦しかった事もすべて等価で、まとめて「レッドドラゴン」な奈須きこのです。

あれだけ豪華なセッションは他にはなく、(人間的にも、イベント的にも、ヴィジュアル的にも)いちプレイヤーとして心行くまで楽しませていただきました。

その中でも特に記憶に残ったコト……といったら、やっぱり四夜でしょうか。

おりしも、関東は記録的な大雪の夜。昼から始まったセッションは午後十時過ぎにクライマックスを迎え、誰も予想しえなかった結末を迎えました。

あの一番の日、開催場所から家が近いこともあり、自分は電車ではなく徒歩で帰路に着きました。

雪でうずもれたアスファルトを転ぶように歩きながら、「生き物は虚しい。そして世界は美しい」とスアローごっこをして帰ったものです。

レッドラにおいて、プレイヤーの誰もが「自分の主人公像」を演じようと戦いながらも、決して「この物語の主人公にはならない」ように牽制しあっていたのがたまらなくスリリングでした。

あれこそ生きた物語だったのでしょう。

テーブルトーク初経験者であるしまイブキさんは、その無垢な成長性から。

紅エイハさんは“ひとりのけだもの”としての純粹さから。

カグラバリョーゴは裏で飛び回るのが楽しいから。

ウ・ローさんはいつ死んでもいい、むしろ突発的な死こそが結末だと語る熾烈さから。

クズはメインになると面倒くさいから。

こんな面子をまとめあげ、物語を「あのかたち」にもっていった三田さんに敬意と感謝を。

こんなドリフトを楽しんでくれた読者の皆さんに感謝と、ドヤ顔を。

そして、悪魔のようなオオタカツシに天誅を。

レッドドラゴンは全セッションを終え、今は記録として新しい物語になりました。

本書はその記録の一端、ひとりのプレイヤーが物語に挑む前に起こした幾ばくか指針と、セッション中に起きた感傷を纏めたものです。

本来なら表に出す価値のないものですが、マチアソビというお祭りを添える一端にでもなれば幸いです。



Comment from SHIMA DRILL

ソードホルダーのシルエットが面白くなるように意識しました。



Comment from KINOKO NASU & SHIMA DRILL

奈須：立ち姿。クズにはもったいないスタイリッシュさ！ ……でもなんだろう、こうじっと見てると……なんかペンギンが連想されるんだ……気のせいかな……

しま：これはメルルさんにも、久遠寺邸の魔女様のごとくペンギンきぐるみを着てもらおうか…！

奈須：それキャラ的にすごく近い。……ってちょっとしまさん!? となりのページになんか見た事ない子がいるんだけど!?

しま：本編ではだせなかったショットサスペンダーがいまここに！



スアロー・クラツヴァーリ

概要：

・ドナティア人 25歳。

正しくはスアローではなくスアロウ。発音しにくいのでスアローで。家名をクラツヴァーズにして略してクズに、というのもギリギリまで迷ったけどまあ、それはプレイ中で表現できれば。

ドナティア帝国北部（に見渡すかぎりの雪国があるなら）の門閥貴族。

手にしたものを前触れなく壊してしまう「粉碎」の呪いに罹っている。

（粉碎の呪いは大なり小なり一族にかかっていたもので、スアロウはその最高値）

領民を守る、領地を清く正しく運営する、という貴族としての在り方を尊重するが、選民思想はほとんどないお気楽ぼっちゃん。

軍属経験を経て、一つの契機から黒竜騎士になる。

黒竜騎士が背負わされる重い代償については“まあ、人間誰であれ苦しいんだし、こういうのもアリだろう”と軽く受け流している。

金遣いは荒いくせにお金にはうるさい。経済観念は備わっているものの、自分には適応されないので茶化している節はある。通称、孔雀の羽の～、湯水の如き～。とにかくジャンジャン壊してバリバリ消費する。

容姿：

・身長：185cm 体重：80kg

バランスを考えて、金髪orダークブロンドの、典型的な西欧系美形で。

既存作品で例を挙げるならタイガー&バニーのバーナビー。あるいは漫画「皇国の守護者」のカミンスキイ。ああ、コイツ優しい系のハンサムだけど中身は人間じゃなくて爬虫類だな、とじんわり匂わせるような。（バーナビーはいいイケメンだけどネ！）目の色は青か藍（黒に近い青）。絵的にじっくりいく方を採用。

冷酷な顔立ちだが、表情に嫌味がないので冷酷なイメージからは遠ざかるように。甘いマスク、柔らかな物腰。

（根は悲観主義者で虚無感に苛まれているが、それは顔にはださないように）

髪型はバリバリのクセツ毛で。いっそレッドドラゴンの世界観から浮くぐらい少年漫画チックでもいいのかも。超人ロック系ともいう。

弱気はある（どことなく弱気、悲観主義）が、分かりやすい主人公の青年騎士。

人なつっこく、どことなくチキン体質（に見える）。これ重要。

体格は細いモデル体型ではなく、騎士として正しく筋肉のついたもので。鎧ぬぐと結構マッチョ。君よ、男ならマッスル立て。

一見した時に目を引く要素として、

1. 黒竜騎士団の鎧の重厚さ 2. 両手（肘から手にかけて）は他の黒竜騎士とはあきらかに違うデザインを心がけるといふものを。

“使ったものを壊してしまう”という呪いをネガティブに、かつ一見して印象づけたいので。パターンとして「腕の部分だけ鎧が軽装」「右腕左腕でデザインが違う」「腕だけSFチックな意匠が入っている」とか？

また、イメージ等で「武器を握っている立ち絵」があるとしたら、武器は極力「鞘に収まっている」状態にしてください。

性格：

・秩序・善。内向的、弱気、能動的。

表向きは人当たりのいい温厚な貴族の御曹司。

きちんとした秩序・営みを良しとする気のいい兄ちゃん。

が、深層意識では退廃的な虚無感にどっぷり使っているためドライ。

仕組みとして気持ちの悪いコトを嫌い、後々面倒なコトにならない程度のトラブルには仲介に入り、事態を悪化させる。

（仕組みとして気持ち悪い、というのは善悪の観念ではない。スアロー自身は気づいていないが、“その結果”にまつわる子供が長く生きるか死ぬかが基準になっている。黒竜騎士に市民が手打ちにされるのはスルーするが、その市民が子供連れだった場合、それはよくない、と割ってはい、みたいな）

その悪癖からか、周囲からは温厚、物好き、チキン、平和主義者、と思われている。スアロー本人もそうありたいと思っている。

が、根本の部分でスアローは人間の命も、物のカタチも大事なものではない。あまりに強い粉碎の呪いのため、あらゆるものはあっさり失われるものだからだ。

それは悲しいが、特別なものでもない。こだわる点があるとすれば、それは「壊れる」という運命そのものだろう。「死」という結果を悼むのではなく、「死ぬ」という過程に意味があるのだろうとすがっている。

（※「月姫R」の志貴に近い価値観として演じるように。あちらは死を視覚化できるため死を特別視するコトがなくなり根本が冷め切った人間になっている。志貴は死にやすい世界を嫌いながら愛しているのに対し、スアローは壊れてしまうものを尊重しながらも憎んでいる）

スアローの根本にあるのは無常感だ。

自分が使う物は壊れる。

なのでできるだけ触らないように、長生きできるように距離をとるが、それらが自分とは無関係に壊れた時、うろのような空白が心を占める。

哀しみも同情もない。“そんなものだ”という感想すら湧かない。

幼少期から失う事しかなかった彼にとって、物の損壊、命の終わりは朝食について

いる食前酒のようなもの。とりわけあってもなくてもいいものだ。

仮にメルルに本音を打ち明ける時があるとしたら、
「君が死んだら悲しいとは思う。
いま想像しただけで立ち直れないぐらいのダメージだ」
「でも実際に君が死んだ場合、僕は何も思わないだろう。死は悲しいと思うが、一度も死を悲しんだ事がない。僕はそういう人間だ」
と、淡々と語ると思われる。

根が単純なので感動屋でもあり、珍しいものを見ると素直に褒め称え、楽しみ、手に取りたがる。(そして壊す)

感動している時は冷静さを欠いた子供になるのもうしょうがない。壊すしかない彼にとって、新しく生まれるもの、新しい未来を築くものはそれだけで“かなわない”ものなのだ。

また、道の混沌術にはトラウマがあるのか苦手。
「だって彼ら、背中に目とか口とか出すんだぞ!? 発想が普通じゃない! 新しいからって何でも許されるワケじゃないんだってば!」

対人方針：

秩序を重んじる気質なので基本的には善人が好き。
が、それで誰彼かまわず好意を持つと人間関係は複雑化するし、正直めんどいので「味方はだれであろうと好きになる。敵は誰であろうと嫌いになる」という自分ルールを実行している。
生きる上だけならこれが一番分かりやすくて楽。
女好きだが、たいていは一夜限りの関係をよしとする。
“人間まで壊してしまうのではないか”という恐れを抱いているため、人生の伴侶をめとる事を考えた事もない。必然、クラツヴァーリは自分の代で絶えろと思っている。

トラウマ：

崩壊の呪いで多くのものを壊してきたスアロー。
家具を壊し、家の財政を壊し、息子の治療を諦めた両親の心も壊した。
この呪いがいずれ生命にも及ぶのではないのか、という恐れがスアローの心の瑕となっている。
幼児時代、両手を拘束されて監禁生活であった事はトラウマにはなっていない。当然の処置だと思っている。
物心ついた時からその恐れがあったスアローは壊れないもの、劣化しないものに憧れた……というか、存在してほしかった。歳を取らないものが、変わらないものが本当にあるのなら、自分の呪いがもう“そういうもの”であっても安心できるからだ。
(その夢想は現実を突きつけられてあっさり霧散することになる。後に言う、スアロー

様まじクス事件である)

口調：

一人称は僕。
立場を求められる時は私。育ちはいいので口調は丁寧。
パニック(興奮状態)になると年甲斐もなくはしゃぐ。幼少期、本気で騒げなかった反動と思われる。
二人称は「君たち」「そちらの方々」。貴方、は極力使わない方向で。

➡第一回セッションから追加

スアローは忌ブキを「さん」付けて、エイハを「くん」付けて呼ぶようにする。
これは本能的に忌ブキを貴人として感じ取り、エイハを同類として感じたため。
細かいこだわりだけど忘れないよう注意。

国に対する考え、思想：

ドナティアへの愛国心はある。仮に、ドナティアがどれほど非道な行いをしていても失望はしないし、離反する事もない。
ただしスアローの愛国心は本人から生まれたものではなく、両親から受け継いだもの。両親からの贈り物なので理由なく捨てないだけ。
スアロー自身が「ああ、これは思い出より大切なものだな」と感じたものがあれば、そのためにドナティアから離れる事はあると思われる。結局その場の雰囲気なんだな!

ロール方針：

主人公タイプのルックスだが、主人公気質にはならないように。
極力、自分からは何もしない/何も得ない/何も奪わない行動を心がける。のれんに腕押し。パーティー全体の方針を決めるような選択はさける。運命戦を任されるなんてもってのほか。
これは「面倒くさがっているだけ」のようにロールする事。本心は「何一つ与えられないのなら、何一つ決めてやるものか」というスアローの精一杯の抵抗心からくるもの。主人公系のキャラデザだが主人公にはならないよう立ち回るように。

“何も決めたがらない”のは自分をろくでなしと自覚しているからだが、そこまで自身が“いるだけで害悪”と分かっているなら当然の指摘が出てくると思われる。以下は過去にあったであろう、友人との会話シーン。

友人「そこまで分かっているなら自殺しろよ。自分が迷惑な生き物だって理解してるんだろ」

スア「そうなんだけどねえ。人間、そこまで分かっているでも死ねないのが困りもので」「それに、ほら。ボクだって人並みの欲はあるんだし。一度ぐらいは楽しいと感じてみたいんだよ」

ひるがえって、楽しいと感じられた事は一度もないという事実。

ライフパス

レッドトラゴンのキャラクター作成は二段階に分かれています。
各プレイヤーたちがもちよった「キャラクター設定」（これを知っているのはそのプレイヤーとFMだけ）と、
みんなで顔をあわせて一緒に出したライフパス（それまでの人生）です。
ライフパスは出身国・家柄ごとに様々な項目が作られており、それをダイスロールで決定していく「プレイヤーにもFMにもコントロールできない、運命が作ったキャラクタープロフィール」と言えるもの。以下はスアローのライフパスです。

経歴：

1～5歳：庶民の子供と仲良くなった 6歳：貧民街にて貧富の差について
7歳：小鳥が野良犬の餌食に 8歳：黄爛人の武僧と知り合う
9歳：貧民街にて～ 10歳：何不自由なく貴族として暮らす
11歳：ドナティアの偉大な歴史。絵本に夢中。 12歳：何不自由なく
13歳：司祭のありがたいお言葉。唯一神スゲー 14歳：家庭教師登場の巻
15歳：庶民の子供と仲良く。友人。 16歳：職人仕事につく
17歳：世をはかなんで修道院に 18歳：0。黒の竜の気紛れでその知遇を得る。
19歳：決闘を申し込まれ、勝利する 20歳：同じく
21歳：まじりものの奴隷を購入 22歳：大恋愛をするが財産が目当てだった
23歳：従軍 24歳：狩猟にあけくれる 25歳：世を憐んで修道院に入る。

以上の経歴がダイスによって決定しました。
この後、FMに相談し、キャラクターに合った微調整をさせてもらい、

1～5歳：庶民の子供と仲良くなった（ではなく、監禁状態に）
6歳：貧民街にて貧富の差について 7歳：小鳥が野良猫に餌食に
8歳：貧民街にて～ 9歳：ドナティアの偉大な歴史。絵本に夢中。
10歳：まじりものの奴隷を購入 11歳：黄爛人の武僧と知り合う
12歳：家庭教師登場の巻 13歳：何不自由なく貴族として暮らす
14歳：何不自由なく 15歳：司祭のありがたいお言葉。唯一神スゲー
16歳：庶民の子供と仲良く。友人。 17歳：世をはかなんで修道院に
18歳：職人仕事につく 19歳：0。黒の竜の気紛れでその知遇を得る。
20歳：決闘を申し込まれ、勝利する 21歳：同じく
22歳：大恋愛をするが財産が目当てだった 23歳：世を憐んで修道院に入る。
24歳：従軍 25歳：狩猟にあけくれる

このように変更させてもらいました。
以下はもうちょっとだけ細かく設定した回顧録。

・1～5歳：監禁状態

屋敷内、人目のつかない部屋で両手拘束の監禁状態で過ごす。
跡取りなのできちんと教育は受けている。母親も熱心に看護。ただし、貴族的な選民思想は消えていく。
恵まれた家庭環境において「ものを所有できない」ことがスアローの矛盾した価値観を構築していく。

・6歳：貧民街にて

部屋から出てはいけないうちだったが、抜け道から脱出。頻繁に貧民街に足を運ぶことに。貧富の差を知り、さらに特権階級意識は消える。

一方、新しいものを作り続ける事でまわっていく人の街の在り方に憧れを抱く。

・7歳：小鳥が野良猫に餌食に

貧民街から帰ってくると床に散乱した鳥かごとご対面。
触らないよう気をつけて飼っていた心の友・シャークを失う。
自分がどんなに気をつけても死ぬものは死ぬ、と悟る。ちなみに犯人は猫。こわいケモノこわい。

・8歳：貧民街にて～

自分の呪いに関してそろそろ遠視しはじめる。人間とかまほついてもバンバン死ぬじゃん？ 問題はなぜ死ぬか、なぜ死んだかではなく、その後どうするかの話では、みたいな。

・9歳：ドナティアの偉大な歴史。絵本に夢中。

世界の広さを知る。でもかたっぽしか破れる本。その他、もろもろの日用品。
生まれないうち継ぎ問題。そろそろ母の精神が異常をきたしはじめる。

・10歳：まじりものの奴隷を購入

市場でみかけた混じりもの（メルル）を父にすがって購入。
翌日、奴隷ではなく使用人として扱ってもらうように懇願し、まじりものの少女・メルルはクラツヴァー家の執事の養女扱いになる。

メルル、この頃はマジでスアローにベタ惚れ。王子様っつか、救世主視していた。
メルルはスアローの呪いを知り、妙な使命感さえ覚える。

・11歳：黄爛人の武僧と知り合う

屋敷に食客としてやってきた謎のマスターアジア。スアローは彼から武術を教わるも一年で飽きる。
一方、一緒に習いはじめたメルルはすっかり武僧と仲良くなり、内弟子に。（ここからメルルの黄爛への傾倒が始まる）

・12歳：家庭教師登場の巻

特に何もなし。努力家のメルルと、暇を持って余すスアロー。

・13～14歳：何不自由なく貴族として暮らす

しかし家の財政は刻一刻と逼迫しているのがあった。スアロー対策に時止めのゼリー（アイテム欄より。超高級品ですね、アレ！）とか湯水のように消費していたんだよ、きっと。

一方、メルルはシャーベット商会で働きはじめる。

・15歳：司祭のありがたいお言葉。

唯一神スゲー、とこっそり騙される坊ちゃん。

無から有を生み出す創造魔術に一縷の希望を見いだすも、スアローに才能はなかった。
スアローが残念がっているのでメルルが「では自分が」と頑張るが、メルルにも才能はなかった。

・16歳：庶民の子供と仲良く。友人。

メルル繋がりで友人に。メルルに惚れているが言い出せない友人A。友人Aはのち、教会に属する。

・17歳：世をはかなんで修道院に

衝撃の「メルルは育っちゃったから」発言。加えて母親が精神病棟に。
スアロー、世をはかなんで修道院に。だが一年で飽きる。

・18歳：職人仕事につく

ものづくりに憧れて職人を目指す。
フレイザードがガソリンスタンドに勤めるようなものである。さんざん思い知った後、一年でクビ。
メルル、本気でスアローはバカなのだと思いはじめる。

・19歳：O。黒の竜の気紛れでその知遇を得る。

メルルが攫われる。救出の為に事件に介入し、あれよあれよとたらい回しになったあげく、黒竜と対峙することに。

※ここではまだスアローは“この凄くてやばい生き物”が黒竜である事を知らない。

ようやく救い出したメルルはほぼ死体。スアロー、黒竜にメルルの蘇生を願う。黒竜、「黒の共有」を施す（左足に契約の跡ができる）。

黒竜「それは仮契約だ。七年たてば腐れ落ちる」

ス「そんな、メルルが可哀相だ！たぶん！」

黒竜「……腐れ落ちるのはおまえだけだが」

ス「そんな、僕がバカみたいだ！すごく！」

どうすればいいんだコイツ……

黒竜に見逃されて（あるいは、先を見据えた上で）地上に生還するスアロー。

・20歳：決闘を申し込まれ、勝利する

・21歳：同じく

なんでケンカばかりするのん？

なんでケンカばかり売られるのん？と不思議がるスアロー。

理由はシャーベット商会を盛り立て、人気者になりつつあるメルルが「私はスアロー様の使用人ですから」と男を袖にするからであった。

・22歳：大恋愛をするか財産が目当てだった

その通りであった。しかも借金まで押しつけられた。

メルル、あまりのことに爆笑した後、「なにやってるんですかアナタは！」と激怒。女詐欺師からの借金だけは帳消しにするも、財産はもう取られた後だった。

・23歳：世を偽んで修道院に入る。

失恋のショックで修道院に。しかし一年をまたずクラツヴァーリ家が破産しそうだと知る。

母は病院だし、父はもう歳だして修道院を出る。

・24歳：従軍

金のために軍人の道へ。メルルは止めるがスアローの決意は固かった。

メルルが止めた理由はスアローの身を案じてではなく、

メ「スアロー様に軍人が勤まるとは思えません。回りに迷惑をかけるのはクラツヴァーリ家の恥です」とのこと。

・25歳：狩猟にあげくれる

軍人になってもお気楽なスアロー。軍属しながらも暇を見ては狩りに出る。ハントは貴族のたしなみだよ。年の終わりにメルルが面会にくる。

メ「ここで残念なお知らせです。まことに申し訳にく……くはないですね。水が低きに流れるが如く、クラツヴァーリ家が破産いたしました。何かご感想はありますか？」

ス「それ、もう少しオブラードに包んで報告する事じゃないかな。メルルはもうちょっとボクに優しくしてくれてもいいんじゃないかな！」

メ「スアロー様に優しく？ 砂糖に蜂蜜をかけるような行為ですね」

以下本編。

・本編導入：黒竜騎士への過程

破産……家が成り立たなくなったとはいえ、クラツヴァーリの領地を国にとりあげられる事はさげたい。そう考えるスアローだが、打開策はまったくなかった。

とにかく借金の返済だけでも手に負えない。途方に暮れるスアローに、メリルは「黒竜騎士になれば破格の給金が与えられる」と提示。

ス「知っているけど、なろうとしてなれるものじゃないよ」

と返すも、とにかく志願してみろ、とメリル。

(メリルはドナティア史を学び、あの日の生き物が黒竜だと確信しているのだ)

仕方なく黒竜騎士に志願するとあれよあれよと話は進み、スアローは以前のような“よく分からない暗闇に潜む、よく分からない何か”状態の黒竜ではなく、正しく黒竜本体と契約対峙することに。

黒竜の座する洞穴にて、黒竜と面会し七年前の「凄くてやばい生き物」だと合点がいくスアロー。

黒竜は「いつまでたってもあの日仮契約した若造が来ない」と不思議がっていた。七年経ったら腐るといふ話を信じていなかったのか、と詰問。

ス「いや、それは信じていた」

「でも、その為にアナタを探すかどうかはまた別の話だ。七年後にこの体が腐れ落ちるといふのなら、」

それはそういう運命だったのだろうか、と誇張も強がりもなく語るスアロー。

黒竜「では命長らえる為の契約はしないと？」

ス「いや、それはお願いできないだろうか。助かると分かった途端、すがりたくなるのが人情だと分かかってほしい」

黒竜、スアローの願いを聞くが、条件としてニルカムイ——レッドドラゴンの探索を命じる。(と思われる)

黒竜は更に成功報酬として、ひとつ願いを叶えよう、と提案。

(FMへ：黒竜がフレンドリーすぎるならスアローから提案するというカタチでお願いします。任務につくのが条件なら、成功報酬は？と 任務につくのと成功報酬は別だろう、みたいな)

スアローは黒竜に崩壊の呪いを解くことを願う。

黒竜は約束するものの「おまえには選択を二回迫る」と予言めいた言葉をつきつける。

一度目の選択は「私と契約をするか、否か」

契約するといったものの、まだ正式にはしていないスアロー。

これが悲惨な死の運命から逃れる最後のチャンスである。契約する、と自分の口ではっきりと選択する。その代わり、達成時には崩壊の呪いを解いてほしい、と。

黒竜「赤竜に届いたのなら望みは叶えよう」

スアローが去る時、黒竜はこうも語る。

黒竜「おまえは人間そのものだ」

黒竜「最後までその願いを抱いたままでいられるか、興味深い」

かくして正式に黒竜騎士となったノンポリ騎士。

クラツヴァーリの屋敷に戻ったスアローを迎えるメリル。

ス「ニルカムイに向かう事になったよ。当面の金は得たが、この屋敷は手放す事になりそうだ。まあ、それはそれでスッキリする。努力しても止められない事はあるからね」

事の顛末を聞き、従者として付いていく事を当然のように決意するメリル。

数日後、黒竜騎士として登用されたスアローの前に、従者仕様に着替えたメリルの姿が。

ス「君までボクに付き合う事はない！ ニルカムイだぞ!? 死者が蘇るやっばい鳥なんだぞ!?!」

メ「勘違いしないでください。私は債権者としてスアロー様を監視する為、同行するのです」

ス「……なんだって？」

メリル、クラツヴァーリの屋敷はまだスアローのもので、売りにだされていたところを自分が立て替えて代金を支払った、と説明する。

ス「そんな金、どこにあった!?!」

メ「私、シャーベット商会の会長ですから。スアロー様には話す機会がありませんでしたが」

「まあ、それも本日付で引退しましたが」

仰天しつつ、なんてバカな事を……と呆れるスアロー。

一度この「使用人の構え」に入ったメリルはテコでも動かない。仕方なく、正式に従者として登録し、任務に向かうスアローであった。

・粉碎の呪いについて (表向き)

スアローが持つ特殊スキル。

使用する武器・道具の効果を三倍に引き上げるが、その威力に耐えられず使用アイテムは一撃で砕け散ってしまう。

見た目はあくまで「強化 (ブーステッド)」の一種とする。

・粉碎の呪いについて (真相)

道具を手にして使うと一回で壊してしまう呪い。

複雑な機巧、精密な加工が入った道具ほど壊れやすい。

生まれつきスアローにふりかかっていたもので、クラツヴァーリには時折このような人間が生まれるが、スアローの呪いの強さは歴代でも類を見ないものだった。

実はこれ、粉碎ではなく「消費」の呪い。

道具は壊れているのではなく「使い切られて」いるのである。

その為、一回の使用でその道具が「最後まで行うパフォーマンス」をすべて出し切る。使用後に壊れてしまうのは「力に耐えきれなかった」からではなく「その用途を終えたから」。

黒竜はこれを「人間そのもの」と語る。

消費文明、魔素に依存しながらも資源を使い、世界を消費していく人間の業。その概念が結晶したものだ。

竜は永遠であり、人は循環である。

スアローがこの「呪い」を否定した時、人間の在り方に変化があるのかどうか。事はスアローだけの問題なのか。概念である以上、種全体に及ぶのか。黒竜の「興味深い」発言はこの一点を指しているものとする。

・黒の共有：

ライフパスによって取得したスキル。

瀕死のメルルを救うため、黒竜の力で竜化し、他人と命を繋いだスアロー特有の竜魔術。黒竜騎士としての力をそのままメルルに複写する。

運命共同体に見えるが、スアローが死んでもメルルは死なない。

・黒の刃：

ライフパスによって取得したスキル。黒竜騎士定番の魔素攻撃。

オーソドックスな竜魔術だが、スアローの崩壊の呪いはこれにも適用されるので破格のダメージをたたき出すと思われ。黒いエクスカリバーなんやな。

・目的：

スアローの当面目的は黒竜との契約に従い、赤竜を拿捕する事である。

その報酬として「崩壊」の呪いを解くことを最終目的とする。

……しかし、冒険の中でスアローは思い知る。

自分が崩壊の呪いを憎んでいないこと。

もうとっくの昔に受け入れていることを。

なので、彼が人生をかけて解決したい事はただ一つ。

呪いの正体。なぜこんな呪いが存在するのか。この呪いは何なのか、という根本的な疑問である。

→もし彼のクエストが成功するなら、その問いは赤竜に対して向けられる。赤竜は語るだろう。それは粉碎ではなく消費だと。

黒竜は言った。選択を二回迫る、と。

一度目の選択は終わった。

赤竜を拿捕し、約束を叶えたスアローに黒竜は語る。

黒竜「二度目の選択だ、人の子よ」

「自らの意思で選べ。その呪いは解くべきか、解かぬべきなのかを」

スアローの出す結論はどのようなものになるかは、セッションの流れに委ねたい。

・その他：

・物に腐心していないようで、大事にしているスアロー。

どっちなんだ、という質問に

「それがこだわる価値のないほど脆いと知っているから、大切にするんじゃないか」

「君は、今にも壊れそうなものを、守ろうとは思わないのか？」と返す。

・とにかく物を作ること、作る人を大事にするスアロー。

「物を作る人は大事だ」

「とにかくなんでもジャンジャン作るべきだ」

「なぜかって？だって、世の中に永遠のものはない。すべて壊れる。溜め息一つの間にか何か失われる。だから、常に作り続け、増え続けなと。損失の数に、生産が飲まれないように」

イザナギとイザナミの神話はレッドドラゴンにあるのだろうか？ 女は一日に1000人を殺すと呪い、男はならば一日に1500の産屋を建てようと返した話を。

・メルルと似たような雰囲気的女性に対して、

ス 「なんだ、君も話が違う系？」

と気さくに話しかけてみるクズ。

・メルルに対して

極力、メルルに頼らないよう努力するスアロー。

メルル、気が緩んでふと本音で「なぜ私に頼らないのですか？」と質問してしまう。

ス 「君は便利すぎるから頼らないようにしているんだよ。頼りすぎると駄目な人間になってしまいそうだからね」

メ 「もうとっくに駄目だと思うのですが、まだ下があったのですか？」

スアローにとってメルルは特別だが、特別である事を意識しないようにしている。幸福になってほしいと思うからこそ、自分が関わってはいけないと確信している。

ス 「彼女はいまのところ、僕にとっていちばん大切な女性だ。でも、だからといって大切に理由はないだろう？」

やっぱり言動だけ見るとクズなのか。

Comment from SHIMA DRILL

可愛くしすぎない、という指定が故に描いていて未だに一番悩まされるキャラクターです。



Comment from KINOKO NASU & SHIMA DRILL

奈須：見てくれこの素敵なメイドたち……どれをとってもクスと罵倒される未来しか思いつかないぜ……

しま：ジト目でなじられるのっていいですよ～。

奈須：どりるはどのメルルが二番目に好き？ 僕はBだな。



Comment from KINOKO NASU & SHIMA DRILL

奈須：しかし美人+そばかす+辛辣はいいものですね。

しま：それに加えてこの鉄壁のスカートですよ！

奈須：オレ、メルルさんに右下の顔されたら真面目に締め切りを守る自信あるよ。

メリル・シャーベット

概要：

育っちゃった使用人。無口で辛辣。
スアローに仕える有能な秘書、兼、債権者。
もと奴隷。現在はとある商会の名誉会長。(スアローのニルカムイ島行きに同行すると決めた時に会長職から引いている)
没落し、差し押さえられるはずだったクラツヴァーリの屋敷を一時的に買い取った。

外見：

・身長：160cm 体重：44kg
外見年齢25歳前後。表情は自然体だが、張りつめた雰囲気鉄のメイド。
背中までの黒髪をシニョンにしている、表情はいつも睨んでいるように見える、あまり活動的ではない空気、プロポーション(WBH)は大きすぎず、小さすぎず。
美人ではあるが、これみよがしな美人にははいけない。道の端に咲いている可憐な花、ぐらいで。そばかすとか入れてもいいかもだ。
スアローより年上と思われるが、そのあたりは決して明記しないように。
辛辣メイドではあるが、メイド服はNG。メイド服の意匠を匂わせるカスタムメイドが理想的。エプロンだけ残した黒竜甲冑もアリだな！

性格：

中立・善。外交的、強気、能動的。
とにかくイケイケの性格だが、慎み深く、メイドとしての気質がしみこんでいるので無口かつ無表情。
女性らしい柔らかさは皆無だが、身だしなみには気を遣う淑女。
頭脳明晰、合理的、努力は惜しまない、感情に流れない。
クール。メリル本人もどうかと思うほど物事に感銘を受けず、たいていは“そうですか”と受け止めてしまう。
感動屋であるスアローの反応を見て「あれが世間一般の反応ですね」と計っている。(いちいちしゃぐスアローの反応は、彼女にとってもう日常になっている。なくてはならない空気と同じ。でもたまにイラッとくる)
スアローに少女のような恋心を抱いていた事もあったが、「育っちゃった事件」で完全に少女から脱皮。
以後、冷め切った目でスアローの世話をしている。

実は義理堅く、情熱の人。
自分を救い、運命を変えたスアローに最後まで仕える。
たとえ呆れたりイラッとしたり失望したりする事はあっても、彼女が積み重ねてきたスアローへの親愛の砦が崩れる事はない。ヒビが入る程度である。

口調：

一人称は私。淡々とした女性口調。慇懃無礼。
二人称はほぼすべての相手に対して名前に様づけ。

経歴：

生まれつきの奴隷。
12歳の時、「歳を取らないまじりもの」と偽られて売られていたところをスアローに買われ、翌日、使用人として人権を与えられた。
以後はスアローの為に尽くすと決め、黄爛の武僧や家庭教師たちに熱心に習い、数々のスキルを獲得していく。
養父である執事が過労から倒れ、クラツヴァーリの財政管理を手伝うようになってから商人に興味を持ち、以後、使用人と両立して商会で働き始める。

屋敷で働く中、スアローの苦悩を幾度となく目の当たりにした。
誰にでも明るいスアローが、明かりの落ちた部屋で両手をさげ、亡霊のように佇んでいる——そんな姿を見てきたメリルは、スアローの虚無感に気づき、ますます忠誠心を高めていく。「私が、あの人を支えるのだ」みたいな。

しかし、メリル19歳の時に事件は起きた。
商会での働きが認められ正式な社員になったメリルは周囲へのパフォーマンスとして礼装などを着飾ってみた。
めったにしない、というか生まれて初めて自分からしたおしゃれである。
商会でのお披露目を終え、ほのかな期待を胸にそのままの姿で屋敷に戻るメリル。そのドレス姿を見て啞然とするスアロー。
時が止まったかのように動かないスアローに、メリルも動揺。
“まさか、本当に今日が人生最高の日なのですか？”と動悸を抑えながら、クールにスアローに歩み寄るメリル。

が。
ス 「話が違う」
「なんで育っちゃったんだ？」
「ずっと幼女のままで聞いたのに、これじゃ詐欺じゃないか！」
メリル、百年の恋も冷める。……冷めるが、熱が冷めただけで、もうメリルの心には動かしようのないモノが鎮座していた。
以後は毎日のように失望しながらも、スアローの人生の助けになるよう技術を学び、商会を大きくし、財産を築いていく。
メ 「……ところで。育つというのなら毎年育っていましたが、スアロー様の目は節穴ですか？失礼、ドーナツのように空洞でしたね」
ス 「いや、毎年ちょっとずつ変わっていたのは知ってたけど、あれぐらいは誤差だ

よね？あれで成長しているなんて言ったら世間のレディたちに失礼だ！」

21歳の時、シャーベット商会で破格のポストにつく。

それを危険視した商会重役によって拉致され、秘密裏に排斥されそうになったところをスアローに助けられる。

(メリルが運ばれたのは商会重役が秘匿していた隠し倉庫のひとつ。古代の洞窟とか地下墓地とか、その手のたぐいで。黒竜の息吹が残っているのに相応しい場所を)

(また、スアローが駆けつけた時にはメリルは既に虫の息だった)

メリルは竜魔術・黒の共有によって一命を取り留める。

……実のこの時からメリルは歳を取っていないのだが、スアローには黙っている。つーか七年経ってもその事実気づかないスアローにマジビリピリピキっている。望み通り、歳を取らない体になったのに！

以後はまたも人生ジェットコースターなスアローを支えながらシャーベット商会の跡取りにまで破竹の大出世。

例の重役を蹴落とし、株を買い占め、乗っ取ってしまった。スアローが黒竜騎士としてニルカムイへの軍務につくと聞くと財産を処分、クラツヴァーリ屋敷と領地の流出を手付け金で押さえ、スアローと共に赤竜探索に向かう事に。

設定：

夢の万能メイド。ただし毒舌、敬意一切無し。

数多くのスキルを体得しているが、その大部分は粉碎しか能のないスアローをフォローするためのもの。

※スアローの性格的に、“自分からは何もしない”事が多いと思われる。なので、ストリー上スアローの背中を蹴り飛ばして進ませる最後の手段としてメリルを用意した。

戦闘時、スアローは粉碎の呪いを帯びているためバックバックの管理は彼女の役割となる。スアローの呪いとどの相性を考え、魔素固定具は「放出魔素固定具」を基本として揃えている。

出費を押さえる為に安物しかスアローには渡さないが、ピンチの時はお金をだしてくる。

ス 「集魔四級品！ そんな高価のもの、どこで!？」

メ 「私のコレクションの中でも最安値のものですが、

特別に定価の二倍でお譲りいたします」

ス 「君がどうやって商会を乗っ取ったのかよく分かった気がするな！」

また黄爛人の師匠から武術と道の混沌術を会得しているが、

ス 「混沌術だけは無い。あれはこの世ならざる妖怪が使うブサイク術だ」

とスアローの言葉を聞いてしまい、スアローの前では使用しないようにしている。

メ 「造眼術の素晴らしさが分からないとは、さすがク——いえ、スアロー様。あいかかわらず、見かけだけに特化していますね」

以下は戦闘中によくある風景。

ス 「これで十本目の粉碎か。予定以上の出費だけど、仕方ない。

メリル、ロングソードをもう一本 だ」

シ 「パスワードを 入力 してください」

ス 「は？ なにその切り返し？」

シ 「これ以上の予算運用にはパスワードが必要です。

私の独断でいま決めましたが、何か？」

ス 「何か？って、いまライブで危機が迫っている状況でかい!？」

そもそもパスワードってどういう意味なんだ!？」

シ 「なんであれスアロー様に武器を渡したくない、という私の意思表示です。

言わせないでください、恥ずかしい」

まざりもの：

ところでメリルは何のまざりものなの？という話。

蛇系の魔物でよろしくです。脱皮する事で古い皮膚から新しい皮膚に新生するとかアリ。彼女が幼少期に「歳を取らない」という触れ込みで売られていたのは、まあ、それなりの理由があつてのコト。

目的：

スアローの赤竜探索を無事達成させ、帰還させること。

立て替えているスアローの借金回収もこまめに行うが、それはどうでもいい。

クラツヴァーリ家の再興は、スアローが望むなら全力で協力するという考え。

また、スアローを男性として意識しているものの、スアロー本人が愛を求めない人間だと知っているので結ばれよう、という野心はない。

「あの人は一生涯のままですわね」とクールに切り捨てながら付いていく。

プレイ中 所感等

レッドドラゴンは一日のセッション内容を「一夜」として公開していましたが、セッションは連続して行われたわけではありません。たいてい二日連続で1夜分セッションをし、次回は三〜四ヶ月後にまた、という形式でした。

なのでFMやプレイヤーにとって、二夜から三夜の間、四夜から五夜の間は長いシークタイムとなります。

以下はそんな“セッションとセッションの間”にメモっておいた走り書きです。

ロールプレイの指針としてメモっておいたり、

プレイ中に思いついた事をテキストに起こしておいたり、

予想される状況に対するシミュレートをしておいたり、と取り止めのない内容ですが、ロールプレイの断片として楽しんでもらえれば幸いです。

FMである三田さんへの要望なので、その時のコメントも残しています。

三夜あと、禍グラバおじさんと五本の魔剣。

今後の事も踏まえて、

対人（殺人鬼用）、

対生物（毒。すごくタフっぽいぶがぶさん用）、

対遠距離（投擲に使う。投げ槍が必要な時もあるでしょう）

とバラエティにとんだ内容にしたいのですが、うち一本だけみんなにナイショにする魔剣を発注したい。

おバカなスアローを補佐するから、という名目でインテリジェンスソードを作ってもらいますが、これ、本当の用途は「知性」より「知覚」に特化したものになりたい。

要は「持ち主に対する殺意を感知する」というもの。ぶっちゃけ、暗がりから襲ってくるローさん対策&後ろからガブガブしてくるエイハくん対策。

ちなみにソードさんの名前は「ナンシー」。殺気が近づくと「ナンシーから緊急連絡」と教えてくれる。チェイスHQとかもう誰も覚えていないか。そうか。

第五夜 天凌府君爆誕

たいていの事は受け流そうと努力してきましたが、あのワクワク天凌放送にはスアローではなく奈須きのこ自身が吹き出しました（笑）。

なので、あの時の素直な気持ちをテキストとして送りますので可能なら付け足してください。これ、プレイ時のきのこの正直な気持ちです。スアローの生涯ただ一度きりの殺意かもしないな！



禍グラバ：ローさんって言っちゃ駄目！（笑）

そう、スアローの口元はゆがんでいた。

傍目には愉快げな笑いに見えただろう。

しかし。スアローの胸に飛来したものは、火のような疑問だった。

——なんだあの男は。

死んでいながらも変わらない。

——なんだあの男は。

生き返りながら揺るがない。

——なんだあの男は。

あれほど雁字がらめでありながら、あれほど自由に生きている——！

FMからの質問

Q. 『(黒の竜)との会話で「あなたと契約したのは、そうしなければ後三ヶ月で死ぬと言われたからだ」とありますが、これはどういう設定でしょうか？』

A. もともとはメルルが商会の役員の陰謀で拉致→瀕死の際、メルルを助けるために謎のすごい生き物さん（黒の竜）の気配と契約したスアロー。

曰く「それは仮契約だから、あと七年のうちにワシんとこまできて本契約しないと死ぬぞ」とのこと。

これは黒竜がいじわるで言ったのか、本体がいらないところでの仮契約だからなのかはFMに任せます。

んで、その期限ギリギリに黒竜とあって契約→騎士になったので、そのあたりの「あと何ヶ月以内に〜」が残っていたと推測されます。

これがあつた方がノンポリなスアローにもマキが入るのですが、色々足かせにないそうなのでスッパリ忘れてください。

ただ、「黒竜に逆らったら契約が切れる→もとの姿態に戻る」でスアローが死ぬ、という推測は成り立つので、本気で脅しにはなっているかと。

観客に勘違いさせたい方向として、

『スアローがメルルと共有した理由は、メルルというオプションを作る事で戦力増強をはかったり、いざという時のためのライフタンクにしている』

と思わせておいて、

『もともとメルルの瀕死ダメージを請け負ったので、スアローがほぼ死→黒龍さんが仮契約で助けてやった。どうあれスアローは契約が切れたら死ぬだけ』

という状況にすぎない。スアローにとって黒竜と手を切る、という事は死に戻る事。すくなくともスアロー本人はそう自覚している。

FMからの質問

Q. 『ロズワイセ要塞でシャディと合流した際、好きに使ってよいと言われたお金の内、金貨九十万枚ほど残ってますが、何か使いますか。』

A. 使い道は四つ。

- ・一つ。ハクエイさんに気持ちばかりの詫びとして10万。
- ・一つ。大急ぎでロー・チェンシーとその宝剣の情報を集める。超うでっこのき謀報員を使う等、分かり次第、リアルタイムに報せてもらう。金に糸目はつけない。
- ・一つ。情勢が安定しているいまのうちにできるだけ物資（人材含め）を金で集めておく。90万の大半はこれに注ぎ込む。

用途は「町を一つ起こす事を目的としてあらゆる物資集め」。人材含め、金でつられるヤツは金の切れ目が縁の切れ目になるが、それでも構わない。

これは忌ブキが反乱軍からたもとを別つ、あるいは両国を敵に回した際、せめても準備期間ができるようにとの配慮。数ヶ月しか持たない「イブキさんの町（拠点）」だけど、逆に言うと数ヶ月、考える時間はできるよ、みたいな。

無駄になるならなで、そのあとはシャーベット商会で売り払えー。

- ・一つ。スアロー「僕のポケットマネーとして十万」

最低だな！

メリル 「カグラバ殿には、自分にそれだけの価値はないと返答していたはずですが……」

スアロー「うん。でも、それは僕の事情だ。カグラバさんは僕に入れ込んだんだから、そこは尊重しないとね。まあ、あれだ。イブキさんにそのままパスするんだから、その仲介料みたいなものさ」

メリル 「ナイスクズ。では、汚れた金ですが受け取っておきます」

スアロー「なんでメリルが持っていくんだ!？」

メリル 「お忘れのようですが、現在、スアロー様の膨大な借金はシャーベット商会から借り受けているものだからですよ」

スアロー「そうだったー！」

最終夜を控えて、FMに質問

奈須：契りの城とか聞いてないよー！もうこれみんなで殺し合えてコトですよ？いつでも曲がり角からトースト口に挟んだまま朝飯気でローさんが暗殺にくるってコトですよ。三田さんはなに、サド公爵なみのサドなの？真性なの？麒麟船のことまだ恨んでるの？

……まあ、そういうコトなら仕方ない。こちらも対策を立てざるをえません。

最後の最後の奥の手として、

『鎧を、意識して道具として使う』事はルール上可能でしょうか？

瞬間の防御値を三倍にする。無論、その直後に崩壊するけど。

ローさんとスアローの対決は「先手をとるローの攻撃をスアローが耐えきれるか否か」にあると思います。殺し切れればローさんの勝ち。耐えければ反撃でスアローの勝ち。冷静なウローさんの事だから、きっちりこっちの防御点を見据えて七殺天凌の魔素を調整するでしょ。それが最後の一手になった場合、この奥の手は彼の意表を突け

ると思う。

ス 「稜府君なんて怪物を相手にするんだ、これぐらいの奥の手は用意してある」
もっとも、これを使ったら次はホントに生身なのでそんなピンチには陥りたくはないもんですが。

最終話を控えて～黒竜編

次が最後という事で、今までの伏線がすべて回収されると予想。

赤竜に会う前に黒竜はかならず「呪い」について言及してくるだろうから、事前にスアローの方針を決めておこう。



>黒竜がスアローの呪いを受け継ぐというのなら

「断る。この呪いは人間のものだ。人間に与えられたものだ」

「おまえたちにくれてやる道理はない」

なんのために今まで耐えてきた？

きっとこの呪いの先に、今までの苦勞を酬いだけの結果が待っている、と信じてきたからだ。

それを明け渡すワケにはいかない。

ぶっちゃけた話、ボクは人間なので呪いを竜のものにされてはかなわない。なぜか？

人間だから、人間にわかる言葉で、この結末が知りたいんだ。

かつて竜は永遠だった。

が、死を迎えて延命を図ろうとした。

竜たちの争いはそのためだというのなら――

「かつて貴方たちは世界そのものだった。

貴方たちのあらゆる選択が、未来を築くものだった」

「だが、それは過去の話だ。貴方たちはもう違う」

「永遠を示し続けてきた概念は、永遠にあり続けようとする妄念に成り下がった。そんなものに、この呪いは渡せない」

『この呪いと共に死ぬ』と宣言するスアロー。

当然、黒竜の契約が切れて瀕死に戻ると予想される。

ス 「あ、その前にもうちょっとサービスしてくれないか？」

黒 「なに？」

黒竜はこの先も、違う可能性に手を伸ばすだろう。

スアローなんぞ選択の一つにすぎない。でも、ここで黄爛に赤竜を奪われるのはマイナスのハズだ。

だから――

ス「婁震戒と決着をつけるまで、生かしておいてくれないかい？」

最終話を控えて～赤竜編

上のような展開になった場合、どうあってもスアローは赤き竜退治には参加できない。参加したら黒竜が喜ぶだけだしね。なので、スアローとして忌ブキさんにさせる助け船は一つだけ。危険因子であるローさん、婁震戒の排除。

もしレッドドラゴンと対峙する時、ローさんが忌ブキの邪魔をするのなら先に婁震戒を仕留める。同時にそれでスアローのプレイは終了すると思われる。

(スアロー、婁震戒に向かう前に忌ブキさんに語るチャンスがあれば、以下のものを)

「君たちとの旅は楽しかった。有意義なんじゃなくて、楽しかった」

「赤竜という資源は君が有効活用してくれ。ボクや婁震戒のような外道ではなく、ドナティアや黄爛のような超越者たちの思惑ではなく。

ひとりの消費者として、ない知恵をしぼって、善い方向に進んでほしい」

「僕も、君のように迷えたらよかった」

「子供の頃の話だ。運命を受け入れる事で、自分が我慢する事で何もかもうまくいくと、愚かにも思ったんだ」

「けれどそれは違う。ボクは多くを犠牲にしても迷ったり逆らったりするべきだった。そうするために、あの呪いは存在したというのにね」

「でも、僕には生まれつき、そういう力が欠けていた。あがくという意思が、欠落していた」

「君は十分にあがくだろう。ここまでも、これからも。それが善になるか悪になるかは、正直、僕にもこの世界にとっても、どうでもいい事だ」

「ただ、あがく事は楽しい。楽しかった。それが、人間らしい、という事なんだろう」

パーティーを抜け、婁震戒との戦いに走るスアロー。

その横顔は微笑んでいる。すべて吐き出したいへん嬉しい。

付き添って走るメリルに告白。

「——いやあ、楽しい」

「人生というものは楽しいね、メリル」

メリル、ああ、この人はいま最後の強がりをして言っている、と涙をこらえて微笑む。

「そうでしょうとも。スアロー様ほど、自分勝手な人生を歩んだ方はおりませんから」

(終了。ここまでやっておけば、勝利するにしても敗北するにしてもスアローのやるべき事は終了です)



Comment from KINOKO NASU & SHIMA DRILL

しま：レッドドラ名物、用意はしたけど出番のなかった武器！

奈須：懐かしい！ プレイ前、メリルが前線に出る事はないと思っていたので遠くから武器を射出してもらった必要があったんだ。これが間違っただけで後頭部に刺さるワケ。

しま：そこでもアンラッキーを出す奈須さん、さすがです！



Comment from KINOKO NASU & SHIMA DRILL

奈須：しまさん、こんなに武器細かく描いてたんだ！？

しま：大槌の大剣がお気に入りです！

奈須：……(良かった……これぜんぶメリルの奥の手とかじゃなくてほんと良かった……)

POSTSCRIPT

あとがき

前代未聞のオトナの遊び、レッドドラゴンが大団円を迎えるときいて自分もなにかできないかと思い、こんな蛇足をやってみました。

コンセプトはゼロ円で作る本。

プレイヤーがレッドドラゴンに挑む際につけた設定資料はもちろん、しまどりるさんが描いた設定画は多岐にわたります。

そんな、本来なら日の目を見ることのない「既にある素材」を使って回顧録を作るのなら、お祭りの賑やかしとしてアリだと思ったのです。

なのに、ですね。

「しまさん、こんなコピー誌作ろうと思うんだけど、お蔵入りしているラフ画で使っているのとかありますか？ 以前もらったメリルの初期ver.とか武器一覧とか、見応えあると思うんですけど」

「はい、分かりました。表紙を描き下ろします」(即答)

「よかった、ありがとうございます。これで華のある資料に——ん？ いま、なんかへんなコト言いました？」

「ではカラーでいいですね。それからこれとこれとこれ。キヤラの表情集には色をつけましょう」

「いや、原稿料とか出ないからね！？」

「え？ 参加料は払わなくていいんですか？ ヤッター！」

※一部誇張含む

とまあ、こんな感じで怒涛のしまどりる節が炸裂したワケです。結果、ゲリラ活動的なチラシの裏はこんな豪華な本になりました。

きのごも嬉しい。どりるも嬉しい。

みんなも嬉しい。カツシも嬉しい。

そんな、2014年GWにあった、ちょっとしたイベントの一つとして記憶に残るのなら幸いです。

最後に。

「レッドドラで外に出さない資料を配っていい？」というスイーツな提案を一つ返事でOKしてくれた三田誠氏と太田克史氏に。

超過密なスケジュールの中、素晴らしいイラストを届けくれたしまどりる氏に。

そして混成調査隊の道行きを最後まで見守ってくれた貴方に。

ありがとうございました。

僕らも最高に楽しい大冒険でした。

2014.5.4 奈須きのこ